土器・瓦 40

愛宕神社境内採集の「桃山陶器」

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに　京都市内最高峰である愛宕山（標高 924 m）の頂上に鎮座する愛宕神社は、古来より火伏せの神として知られ、現在も「火迺要慎」の御札を求める多くの参拝者で賑います。その愛宕神社の境内で採集され、京都市考古資料館に寄託された江戸時代初頭の陶磁器類を紹介します。

採集された場所　採集された寄託品は安土桃山時代から江戸時代前半にかけての国産施釉陶器や焼締陶器、磁器、輸入陶磁器、土師器、石製品、鉄製品を含む合計 161 点です（写真 1）。なかでも、茶の湯の席で用いられる美濃産の織部向付、いわゆる「桃山茶陶」が複数認められたことは標高の高い神社境内という特殊性と相まって注目に値するものでした。

写真 1　愛宕神社境内採集遺物

採集地は現在社務所が所在する平場から本殿に向かう石段の東側で、枯れ枝や落葉に覆われる急斜面地でした。遺物は幅 30 m、標高差 50 mにわたって散布していました。急峻な地形のため当地に建物群が立地したとは考えにくく、上方約 50 mには人工的な平場があり、そこは宿坊跡の一つと想定されることから、平場から投棄又は廃棄されたものと考えられます。

愛宕山の沿革　愛宕神社は、全国におよそ 900 社ある愛宕神社の総本宮で、明治時代初頭の廃仏毀釈までは、愛宕大権現を祀る神仏習合の霊山として、信仰を集めていました。文献史料から見ると、貞観 6 年（864）愛宕社に従五位下の神階が授けられた記事が初見です。平安京遷都以降、都の乾の方角に鎮座する愛宕山は、鬼門である比叡山とともに王城鎮護の霊山として朝廷から重要視され、『拾芥抄』には、愛宕山が修験道の盛んな「七高山」の一つに挙げられています。愛宕山には、祭神として愛宕権現太郎坊を本尊として勝軍地蔵を祀り、いずれも火神、軍神として愛宕信仰は全国に広がりを見せました。室町時代に入ると、応仁の乱で愛宕山も焼失しますが、戦国時代に至り、各方面からの信仰の高まりによって、愛宕五坊（長床坊・教学院・大善院・威徳院・福寿院）と称される山上の伽藍が整えられたと考えられます。

近世に入ると、貴族や大名の参詣記事が増えますが、慶長元年

(1596) の大地震によって各坊院は倒壊しました。元和6年(1620)に徳川秀忠の援助に依って、造営及び遷宮が行なわれましたが、正保2年(1645)の出火によって全山が焼亡しています。慶安2年(1649)から再建が開始されますが、五坊は「正保炎上以後今之処移」とされ、それまでは「鉄鳥居之内、廚下左右ニ有」とあることから、炎上後は場所を違えて造営されたことがわかります。したがって、近世地誌類等に多数描かれている愛宕山の風景は焼亡後に再建された姿を示しています(図1)。

つまり炎上前の五坊は、現在の社務所が建つ平場から本殿へと登る石段途中にある鉄鳥居よりも上部にあったことになり、遺物が採集された地点の上部にある平場には、五坊のいずれかの宿坊が所在したと想定できます。その後も地震や火災、台風、落雷によって被害を受けるものの、その都度再建、修復がなされ維持されましたが、明治初頭の廃仏毀釈によって五坊は破却、祭神を愛宕大権現から愛宕大神に改め、現在に至ります。

採集遺物　今回の資料内訳は、陶器141点、磁器13点、土師器3点、鉄製品1点、石製品3点の合計161点になります。施釉陶器が全体の8割近くを占め、焼締陶器、磁器、土師器と続きます。施釉陶器では美濃108点、九州14点、京都1点で美濃産が9割近くを占めます。焼締陶器では、備前3点、丹波8点、信楽3点、不明4点です。磁器では、輸入染付11点のほか、肥前産も2点含んでいます。他に、京都産の土師器皿が3点あります。

器形別では、施釉陶器の皿の出土が最も多く、向付・鉢などの食器類の割合が高いといえます。陶磁器の年代は、大半が17世紀初頭から17世紀中頃に収まるものであり、正保2年(1645)の焼亡が下限の資料と判断できます。

まとめ　採集品の特徴は、皿類が圧倒的に多い反面、向付は一定量存在するものの、天目茶碗を含め茶碗・水指・花入・建水等はほとんど認められないことです。近世には各坊院で参拝者を酒食で供応していたことが知られており、採集品は宴席で用いられた器と考えられます。採集品には桃山茶陶の流通の要であった三条せと物や町界隈出土品には認められない器形もあり、異なる入手経路の存在を示唆するものです。また、織部製品が盛行した慶長から元和年間以降に生産された御深井(おふけい)釉製品の存在は、その後の美濃産施釉陶器の動向を知る上でも重要で、近世の愛宕山の活動の実態を窺い知ることができる貴重な資料といえます。

(京都市文化財保護課　西森正晃)

図1　「愛宕山細図」『京都社寺境内版画集』 国立国会図書館ウェブサイトから転載